～防除室だより vol.44～

病害虫防除室
2020 年 4 月 30 日

イネの育苗期の糸状菌病

1．フザリウムによる苗立枯病

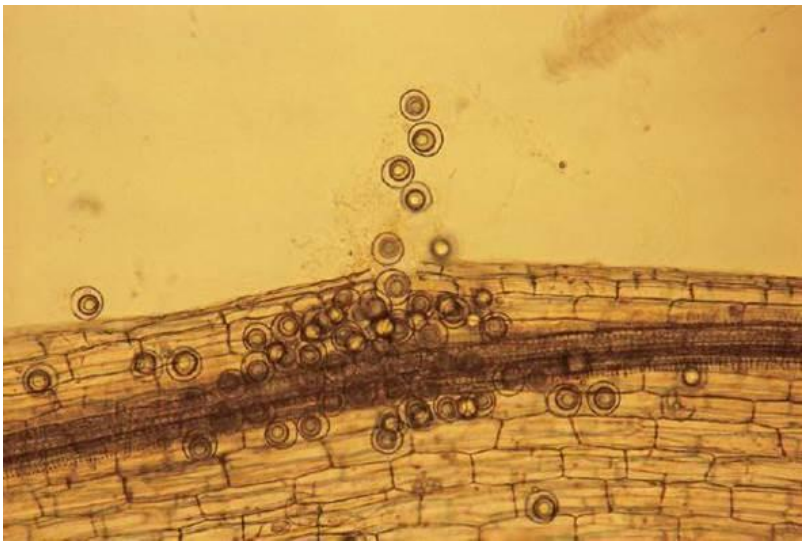
地際に白色の菌糸が見られ、籾は白色～淡紅色のカビで覆われ、「アカカビ」と呼ばれます（左図）。苗は根の先端から黒褐色に腐敗しています（右図）。

病原力は弱く軟弱な苗を侵します。低温や、極端な乾湿の繰り返しによる苗の衰弱が発病を助長します。育苗ハウスの温度管理、水管理に注意して下さい。

2．ピシウムによる苗立枯病（ムレ苗）

葉の先端が萎凋し巻いてきます。根量はあるように見えますが、根全体が水浸状に褐変して（左図：右は健全苗）、根内には球形の卵胞子が多数形成されています（右図）。新根の再生があるので、枯死に至ることは少ないものの、移植後に低温が続いた場合、著しい生育不良をきたした例があります。

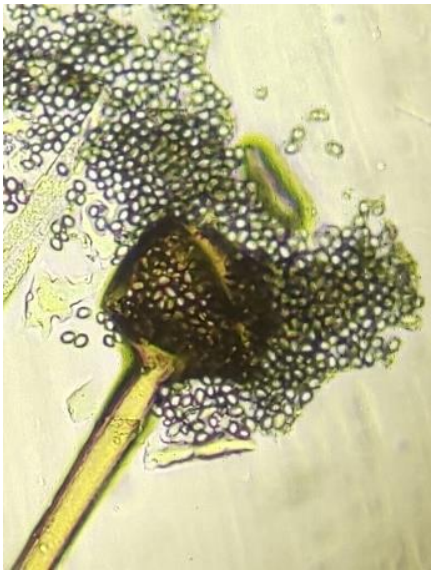
高 pH（pH6 以上）や低温（5℃以下）は発病を助長します。床土の pH や、育苗ハウスの温度管理に注意して下さい。



３．リゾプスによる苗立枯病

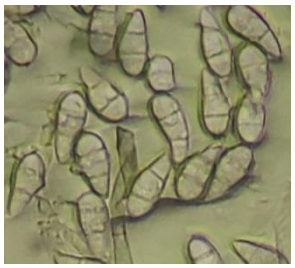
出芽時に育苗箱全体がクモノス状のカビで覆われて（左図）生育が阻害され、苗がカビで覆われると融けるように枯死します（中図）。苗を覆うカビを検鏡すると胞子のうから胞子のう胞子が出ているのが見えます（右図）。

30～40℃の高温を好みます。出芽時の高温を避けてください。



４．ばか苗病

苗が黄化徒長し（左図）、不定根が形成されることがあります（右図）。籾周囲や葉鞘基部に淡紅色粉状のカビが見られることもあります。本田でも罹病株は黄化徒長し、重症株は枯死し、枯死に至らなくとも不稔になります。罹病苗は本田に植えないでください。

５．苗いもち

苗いもちの発生は近年、ほとんど見られなくなりましたが、紛らわしい斑点はしばしば見られるので、病斑の特徴を掲載しておきます。中心に小円形があり、病斑の拡大とともに、葉脈に沿って赤褐色～黒褐色の「壊死線」が現れます（左図）。スライドグラスに、病斑上に押し当てたセロテープを少量の水とともに貼り付けると、いもち病菌の分生子が観察できます（右図）。